

# 大江健三郎の西洋での受容

## Donatella Attanasio

### ドナテッラ・アッタナズイオ

1994年のノーベル文学賞を大江健三郎が受賞した。この受賞は、日本では論争の種となったが、西洋ではどうだったろうか。受賞時の大江はどのように報道されたのか。彼の作品がどのような評価を受けていたのか。この問題を調べるのは興味深いことなので、この文章で扱うことにした。

言うまでもなく、西洋では論争がなかった。論争がおこる前提がなかった。大江は政治活動に関心を持っているから日本では彼のノーベル賞を受賞したことは政治的な意味も持っている。西洋ではその意味がなくなる。西洋ではノーベル賞の受賞の時作者と作品そのものだけが扱われた。どんなふうに使われていたかと言うことを理解するのに、私はそのころの新聞を調べた。イタリアの新聞を中心として（私はイタリア人だから）、イギリス、フランス、アメリカの新聞を調べた。そして、大江の作品をイタリア語に翻訳した学者に会って質問をした。

では、新聞の調査結果から始めよう。いろいろな新聞はほぼ同じ内容を繰り返しているのだから、記事を比べるのは意味がない。従って、新聞全体がなにを書いているのかということを見てみよう。

### 西洋の新聞における大江健三郎

大江文学で強調される面の一つに、日本文学の伝統に対する反逆がある。大江は「一方でもう一人のノーベル賞作家川端康成が培った美的な伝統を破壊した人として、他方で三島由紀夫が激賞した帝国主義的文化から離脱した」(il manifesto 10月15日)人として紹介されている。彼には吸収し、総合し、再創造する能力があって、その能力によって「すべての時代の、またすべての国の最高の文学を日本的シンクレティズムにより組み替え、凝縮した」(il sole 24 ore 10月16日)ことが強調されている。大江は外国文学のなかに刺激的な観念を探すことによって自らを芸術的に成長させた非常に革新的な作家として記されている。

彼の文学はヨーロッパの大作家の影響を受けたことが言われている。「大江はダンテ、ラブレール、バルザックをよく知っていて、今世紀の作家のなかでエリオットとサルトルの方を好む」(l'informazione 10月14日)。ある記者は「大江に影響を与えた師のなかにロシアの大学者バフチンがあって、大江がバフチンから文体の混淆とグロテスク・リアリズムの混入を学んだ」(Corriere della Sera 10月15日)と言っている。別の新聞記者は、大江の「作家としての運命はウィリアム・ブレイクの言葉『you must return to the dark forest, deep river, deep valley, to begin your tormented life again and death』の読書で決まった」(la Repubblica 10月15日)と言っている。

イタリアの多くの新聞は、大江作品のいたるところに直接的か間接的にダンテの影響が見られて、特に大江の一番自伝的な小説『懐かしい年への手紙』は神曲の影響を受けていると強調している。

また、新聞によれば、大江は日本の作家のなかでは自分が安部公房や井伏鱒二の相続人であると思っており、特に大岡昇平が大江にとっての「神話的人物」であることに注意を喚起している。

要するに、大江は「たんなる島国の知識人ではなく、本当に自分の時代と全世界を代表する日本の知識人」(L'unità 10月15日)として記されている。

先にも書いたように、大江は日本の文化的な伝統に対する反逆者として紹介されている。例えば、「『万延元年のフットボール』は全て(現代日本の文化も知らない)心理主義と罪悪感の地獄への降下である。」(La Voce 10月15日)と。

文体についても、大江は伝統文学に反逆する偏見のない革新者として描かれる。例えば、「大江は、特に文体の面で、日本文学の革新者である。つまり、論理的な飛躍や破壊的なシンタックスによって、物語の時間の混乱のなかで新たな秩序を造り出すことのできる意味を探している。」(Avvenire 10月15日)と。

または新聞記者達は「大江の出発点におけるそういう根本的な伝統尊重主義は、西洋文学の実験の深い知識と賞味によって接ぎ木された」(Corriere della Sera 10月15日)と言う。

大江は「たんに日本と言う世界のインタープリターだけではなく、それよりずっと広い社会的、文化的世界のインタープリター」(Il sole 24 ore 10月16日)として描かれる。実存主義の曖昧な味の、「穏やかで分析的で明確な表現によって、人間宇宙の実体の一部を明らかにする」(Il sole 24 ore 10月16日)と言われている。

新聞記者達は大江のテーマとして、「現代人の疎外、女性的宇宙との関係における不可能な救いの追求、死や自殺の観念に取り憑かれること、精神と肉体の奇形性」

(L'Unità 10月15日)を強調する。

そして自然にたいする注意のモチーフと四国の小さな村の思いのモチーフが強調されている。つまり、「多くの小説の背景として、森の中の村が絶えず描かれ、心理的に安心感を与えると同時に条件づける要素になっている。森は、最も最近の文学作品では、ダンテを思わせる『暗い森』の象徴的・寓意的な意味を持って著者に解釈されている」(Il sole 24 ore 10月16日)と。

新聞記者達が強調するもう一つのテーマは憎しみである。「憎しみの、無力な激情の筋が自然の水路と同じように大江のテキストを貫通する。特に、作品から作品へ同じ人物が出てくると同じように、作品から作品へ移る家族の憎しみが」(Corriere della Sera 10月15日)。

たぶん一番強調されたテーマは疎外、孤独のテーマである。例えば、「語り手である“私”は、恐ろしい描写で暗くされた陰鬱な散文の想像力の捻れの中に絶えず沈んで行く。安部公房とともに、大江は大都会の孤独のいらだちをもっともよく描いた作家である」(il manifesto 10月15日)。「大江の時間は閉所恐怖症の時間である。その時間の中で、人と人とのコミュニケーションがどんどん心許なくなる孤独にうちひしがれた、絶望に疲れ切った、もっとも鋭い孤独の内にある、そんな人物達の実存主義的な悲劇が起こるのである。世界からの排除の重さ、または社会の拒否は、世俗の祈りともいえるべき叫び声をあげるまで、彼らの存在の上に重くのしかかる」(Avvenire 10月15日)。

「破壊の爪痕を残す叙述、むかつくようなぞっとする悪寒に満ちた叙述、具体的な傷を幻想的に描く叙述、精神と肉体を病人だ人間を繰り返し定義する叙述」と (il manifesto 10月15日)。

大江の幼年期が特に強調されている。大江は悲劇的で偉大な出来事一杯つまった幼年期の影響を強く受けた鋭敏な作家として紹介されている。例えば、「日本列島の西南に位置する西国のとある故郷の村で、敗戦を臣民に告げるヒロヒトのはっきりとした、線の細い、絶望的な声を聞いたのは、大江がわずか十歳のときであった。そのわずかな、耐え難い、一瞬に、一つの世界が崩壊した。父の家で少年が賛美してきた世界。彼にとっては唯一のあるべき伝統と栄光の世界―彼の家族はサムライの出である―。その世界の頂点に現人神、天皇がいた。その悲劇的な年の、わずか数時間前に (da poche ore ママ)、長崎で二番目の原子爆弾が爆発し、その世界が崩れ去った。子供の頃のすべての確信は偽りに変化したのである。戦後世代の疎外感と定義されたものがこれである」(L'informazione 10月14日)。

大江の作品は第二次世界大戦の敗北のために帝国主義的日本が経験した屈辱に深く刻

印されていると言われている。またはこの屈辱には、戦後の日本が経済的な繁栄に突進するのを見る失望が加わっているとされる。「大江は、考えるのを忘れるほど経済的な繁栄に邁進する戦後の日本を見下しているのを隠したことがない」(La voce 10月17日)。

新聞は「日本と言う国は、戦争の破壊から再出発し、経済的な繁栄の方向に脇目もふらず突進する、悲しく、心のない国である」と言う大江の言葉を引用している (il manifesto 10月15日)。

また新聞に寄れば、大江が1960年以降新左翼の環境のなかで政治活動を始め、学生運動の代弁者になって、他の進歩的知識人も参加した“若い日本の会”の組織者の一人となった。

さらに新聞は大江がサルトルの教えに従って、強い意識と献身で自己の政治的な季節を生きていたと言う。「夢を喪ったこの世界では、せめて自分の状態をよりすくなく非人間的にするのに努力する必要がある」(Corriere della sera 10月15日)。

民主主義的学生の一と新聞は書く—大江が1960年に北京に行って毛沢東に会い、彼を偉大な東洋の哲学者で政治的な指導者と定義して、公然と誉めるのである。同じ年に—新聞は続ける—日米安保条約の再確認に反対するデモに参加した。新聞は大江が日本に「半植民地」と冷笑的な判断を下したと書く (La Stampa 10月17日)。さらに続けて、レーニンの作品は、ドイツの神秘主義者マイスター・エックハルトの作品とともにずっと大江の必読書の中にあった、とも書く。

核兵器にたいする抗議行動は新聞が述べる大江のもう一つの活動である。新聞は1963年に作家が広島に行ったと書く。「原子爆弾の悲劇の観察は、彼の政治活動の中心を平和主義的で核兵器反対の方向に移した」(Avvenire 10月15日)。作家がこの問題について二つの作品、すなわち1965年の『ヒロシマノート』と1970年の「沖縄ノート」を書いたことが強調されている。1964年に—新聞は続ける—大江は中国の核実験の後、日中協会から脱退した。新聞が説明するもう一つのことは、大江が、憲法を初めとして、日本の政治決定に対して自分が我慢できないことを隠さないことである。「我々はもはや国家の中心に天皇を持つことはできない。私は主権を民に賛成である」(La Stampa 10月17日)。

大江は外国人にたいする日本の態度に批判的である、と新聞は言う。アイヌ人を根絶しようとした点で、また朝鮮人被爆者を認めることや彼らに補償することを拒絶する点で、日本はドイツよりもさらに悪い、と大江は述べる。

この批判的態度のために—と新聞は言う—大江は日本文学と日本社会の「enfant terrible」と常に思われてきた。新聞は次のように書く。“左”からの日本観の代表者、

反軍国主義者、反国家主義者、反消費主義者、社会主義シンパの大江は、三島由紀夫が“右”から持っていた国家観に真向から対立し、ちょうど三島と同じように、日本文学の部分的で歪曲した鏡を我々に提供する。新聞は、ノーベル賞受賞の日に日比谷公園の垂れ幕に書かれた文章を引用している。すなわち、大江は西洋には好都合だが、日本人には嫌われている、天皇陛下万歳、と (il manifesto 10月15日)。

もちろん、大江について書かれる時、精神障害者の息子についても触れられる。これほど難しい話題を扱う際に発揮される作者の勇気が強調される。例えば、1964年の『個人的な体験』はなによりも先ずタブーを打ち破った点で大江に名声が与えられた。「日本の考え方では、精神障害者を持つ親戚は、それを秘密にしておく傾向がある。恥の感覚を基礎としている文化では、大江がしたと同じように秘密にされるべき恥辱のもとを明るみに出すのは破壊的なことであった。(中略)自分の悲劇を叫ぶ武士の息子は—大江は武士の息子である—作品の晦渋さにもかかわらず、読者層を獲得した」(La Stampa 10月15日)。

最後に、新聞は大江が長い芸術的なキャリアの間に貰ったいろいろな賞について広いスペースを割く。1958年に受賞した芥川賞、1989年にブリュッセルで受賞してエウロパリア賞、1993年にモンテッロ(シシリー)で受賞した五大陸賞について。ノーベル受賞については反応がいろいろある。大江がその賞に値しないと思う人もいる。例えば、「どうして大江健三郎が受賞したか。1968年に川端康成に賞を与えるために、彼よりずっと偉大な谷崎潤一郎が死ぬのをアカデミーに待たせていた同じ理由になるのだと思う」(La voce 10月15日)。「ストックホルムの審査員は、もう一度日本のことを遅れて思い出したのかもしれない」(La Stampa 10月15日)とスタンフォード大学の Andrew Horvat は皮肉たっぷりに言ったらしい。「谷崎が死んでしまったので川端に賞を与えた。今度は、五十年代、六十年代に、すなわち戦争に傷つき、再生の願いを抱いた、厳粛な日本の世代に名誉を与えるために大江に賞を与えたのである」(La Stampa 10月15日)。

専門家達は太陽の昇る国の文学を認める時期が来たと認めているが、名前についてはかならずしも賛成ではない。Edward Sidensticker は、ただひとつ「もっといい選択がありえただろう」と述べたということである (La Stampa 10月15日)。

今まで引用してきた西洋の新聞の大江氏に関する批評は原則的には日本の新聞の批評とあまり変わらない。これは受賞の直後いろいろな国の新聞記者達がほとんどスウェーデンのアカデミーのコメントを引き写しにしたからである。学者達が独自の評価を体系的に述べるまでには時間が掛って、今のところでは深い研究評価はまだ出ていないよう

である。

しかし、イタリアでは大江の作品に深い理解を示した研究者がいる。彼女は大江氏の作品をイタリア語に訳して、イタリア人に大江のことを紹介した研究者である。この研究者は Nicoletta Spadavecchia と言う。

ここで、Nicoletta Spadavecchia 氏のことを紹介したい。Spadavecchia 氏は1971年にベニス大学で日本語・日本文学科を卒業した。今はミラノの Istituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente（イタリア中亜極東研究所）で日本語・日本文学を教えている。私は1995年2月18日にミラノにある「G. Scalise」アジア・イタリア文化センターで Spadavecchia 氏に会って、大江氏について質問をした。その質問はつぎのとおりである。

### 翻訳者への質問

1) 翻訳の活動はどんな風に思っているのでしょうか。創造的な活動ですが、仕事としてやっていますか。

私にとっては大江の作品の翻訳は単に仕事というではありません。文化的・言語学的研究の深化です。大江の文章は文学的な要素が豊富にあるだけではなく、文化的な要素が豊富にある文章なのです。だからそれを読み、かつ訳すのはこちらの知識を豊富にすることなのです。

2) 大江のどの作品を読みましたか。どの作品が一番いいと思えますか。

大江の作品は非常に読み難いので、私が訳した作品しか知りません。それは次の作品です。『万延元年のフットボール』『飼育』『空の怪物アグイー』『われらの狂気を生き延びる道を教えよ』『みずから我が涙をぬぐいたまう日』『個人的な体験』。まだ大江の作品を少ししか読んでいません。特に最近の作品はほとんど読んでいませんので、自分は大江文学の専門家ではないと思っています。とにかく、読んだ作品の中で、一番好きなのは『個人的な体験』です。

3) 大江について独自の理論をおもちですか。御存じの限りで、イタリアやヨーロッパで大江についての独自の理論をもっている学者がいますか。もしあれば、どのような理論ですか。

まだ荒削りで未熟ですが、大江文学についての独自の理論を持つようになっています。大雑把に言えば、彼の文学の価値は日本文学の伝統的な表現力を西洋の大作家の表現力と融合することにあると私には思われます。よく知られていますけれども彼は日本の書物より西洋の書物をとおして文学的に自己形成しました。一方大江自身は自分よりすこ

し年配の日本の作家の後継者であると認めています。しかしながら、彼の文章には日本の古典の特徴である文体、韻律、おおらかさがあります。たしかに、内容は圧倒的に斬新で、過去との繋がりを断ち切る物であり、独善的で自閉的な世界と社会に対しては批判的な内容です。これは大江氏の人生観や彼の性格を反映しています。これは大江氏の大岡、井伏、安部に対する親近感を説明します。またはどうして彼がセルバンテス、ラブレール、サルトル、ドストエフスキー、メルヴィルのような作家とブレイク、オーデン、そしてわがイタリアのダンテのような詩人を選んだかということを説明します。私の知っている限りでは、イタリアには大江の専門家はいません。ヨーロッパには確かにいますが彼らの理論を私は知りません。

4) 大江がノーベル賞を貰うと予想なさいましたか。

そうなって欲しいと望んでいました。というのは私にとって彼は実に偉大な作家であり、この賞を貰うのに相応しい人だと思っていたので、彼が受賞することをとても望んでいました。

5) あなたは大江氏が受賞に相応しいとおっしゃいましたが、それはどうしてですか。

大江の文学は世界文学だから彼は受賞に相応しいのです。すなわち、彼の文学は日本語で書かれていますが、西洋の影響を受けた文学であり、全人類と関係のある問題を扱った文学なのです。

6) どうして大江健三郎に興味をもつようになりましたか。

まったく偶然でした。十年ほど前に出版社のガルザンティが『万延元年のフットボール』を訳すことを提案してきました。私は翻訳をするのが好きなのです。すでに漱石の『こころ』を訳していたので、提案を引き受けました。

7) 大江と夏目漱石はどこが違いますか。また大江と大岡昇平、井伏鱒二、安部公房はどこが違いますか。

漱石は日本が近代国家になるためにもがき苦しんだ時期の不安の解釈者でした。一方大江は国境を超えたより普遍的な不安の解釈者となりました。大江と大岡、井伏、安部はみんな自分の生きている社会と時代に対して批判的です。もちろん各人はそれぞれ違った方法と違った独自の文体で自分の考えを述べていますが。

8) 大江は自分の作品が難しいと言っていますが、それについてどう思われますか。どこが難しいのですか。翻訳はするうえでどんなところがむずかしかったですか。単語の問題。表現の問題。初期の作品は後期の作品より翻訳しやすいですか。具体的な例をあげて下さい。

大江の作品はもちろなじみのない言葉や表現のために難しいです（周知のように大

江はサルトルの研究者でかつ崇拜者ですから、彼から自由で不規則な言葉の使い方を学んでいるのです。一方、内容はどんどんより複雑でより新しい考えが豊富になっていくので、初期の作品は後期の作品よりも読みやすいのです。『万延元年のフットボール』は大江の作品のなかで私が最初に読んだ作品で、人類学的なモチーフはもちろん自叙伝的なモチーフ（翻訳の時にはそれを知らなかったのですが）が豊富にある作品です。客観的に言えばそれを訳すのは簡単ではありませんでした。

9) ノーベル賞の前に、あるいは後で、また外国で、本が何冊売れたか、ご存じですか。

いいえ、それは分かりません。それについて出版社のガルザンティに探りを入れてみましたが、口を割りませんでした。もちろんいつも赤字だと言っています。大江を売るのは名誉だが収益にはつながらないと言っています。ノーベル賞の後きっと販売が増えたのに違いありません。

10) イタリアとヨーロッパでノーベル賞の知らせがどう受け取られたかということについて、あなたのご意見は。

先ず前置きとして言っておきたいのですけれども、イタリアでは二年前にモンデッロで大江に賞が与えられたと言うことです。この賞はかなり重要な賞であって、受賞者のなかでは大江はただ一人の外国人でした。私はモンデッロの受賞式に行きましたが、そこに集まった新聞記者達はみんなこの非常に素晴らしい人に魅了されました。面白いことに、すべての新聞社の新聞記者がいたのではなくて、特に左翼の新聞記者が、一多分ガルザンティのイデオロギーをもっとも強く共有していたからでしょう一多く集まっていました。とにかく、大江が受賞した時には、とてもびっくりした反応があって、受賞を伝える記事を書いた「Sole 24 ore」の新聞記者から、翻訳者である私は電話を貰ったのですが、彼は「しかし私達は彼のことを全然知らない」と言っていたほどです。すでにモンデッロで知り合った人々を除けば、イタリアの出版界はとても驚きました。彼の文学がノーベル賞に相応しくないと言う人もあり、「これは文学ではない」と言う人もあり、また彼の政治的・社会的参加を批判する人もあり、さらに精神障害のある息子を利己的に利用しているとさえ感じる人もありました。そしてまたしばらく前からこの賞がどういう基準で与えられるの分からなくなったと言う人もありました。しかし私の意見では、読者の何人かは大江の本の数ページしか読んでいないのであって、全部のページを読んだ人はより敏感な人であり、大江の小説を非常に愛するようになるのです。

11) Spadavecchia 先生は何回も大江氏に会ったことがあるそうですが、どんな印象を受けましたか。

とても素晴らしい印象を受けました。三回会いました。一回目はイタリアに長く住ん

でいるある日本の女性作家の紹介状を貰って会うことができました。これは八十九、九十年のことで、ちょうど大江が『懐しい年への手紙』を書き終えたころです。この小説は四百ページもある大作で、ダンテを意識した日本の『神曲』とも言うべき作品です。多読家の大江はそのころ大変な『神曲』好きで、日本語訳はおろか英語訳や、さらにイタリア語の原曲までも読んで、特に天国に魅了されていた時期でした。私はイタリア人なので、彼はとても親切にしてくれて、紹介されるとすぐに彼はダンテについて話し始めました。その時はお嬢さんを除く家族の全員と一緒にでした。すなわち奥さん、音楽家である障害のある長男、科学を勉強している次男と一緒に所に正餐に招かれました。本当に親切でした。

二回目は二年後に私が日本に行った時に会いました。昼の十二時頃に彼の家に行くと、彼と奥さんがスパゲッティとワインを中心としたイタリア料理を作ってくれました。本当になんでもしてくれる優しい人ですが、ただ彼の言葉のなかには少し理解しづらいものもありました。とにかく彼はとても感じのいい人で、内気で、あまりおしゃべりではなく、威圧感がなく、人を窮屈にさせません。私は翻訳の問題について彼と話をしたかったのですが、私が彼の古い作品を訳していたので、彼はこのことに興味がありませんでした。彼は最近の作品を訳して欲しいので、過去に書いたものをしばしば忘れてしまうのです。

しかし三百ページにも及ぶ『万延元年のフットボール』を私が訳したと知った時には、翻訳の仕事は非常に難しいものであり、あんなに難解な作品を書いたことは誠に申し訳ないことだと言って謝りました。最後にどうして彼があのような作風で書いたのかが分かりました。彼はそもそも西洋流の、特にフランス流の言い方を日本語で書こうとしたのだと説明しました。その結果、『飼育』をはじめとする初期作品を私が難なく訳すことができた理由が分かりました。というのは文章構造が同じなのでイタリア語に転換するのがそんなに難しくなかったからです。一方、後期作品では彼がこの西洋の文体の母体から離れたので、翻訳はより困難なものになりました。

三度目に私がモンデッロで彼に会った時、彼は新聞記者に取り囲まれていました。しかし私は彼の魅力とユーモアのセンスを確かめることができました。大江はとても批判精神に富んだ人です。彼の文学の特徴の一つはグロテスク・リアリズムです。つまりグロテスクの服を着た現実を提案して、日常生活からもっとも奇妙で不思議な物を取り出そうとします。いずれにせよ、この不思議な物は彼の個人的な経験から来ています。モンデッロでは自分の家族のことも語りました。ある叔父さんは木の上に住んでいました。日常生活と他の人との連絡を断ち切ろうとしたので。彼は木の上で手紙を書きました。

手紙を投函するために、木から下りましたが、足の代わりに手で歩いたそうです。この話はイタリアの作家イタロ・カルヴィーノを思い出せますが、実際の自分の経験だったようです。こんなことを語るのは彼のユーモアです。

Spadavecchia 氏の言葉の中で一番大切なものは大江の文学が世界文学であるということだと思う。その言葉を考えれば、一つの観察が自然に浮かび上がる。すなわち、大江は分かり難くて、悲しくて、愛され難い作家であるけれども、今後彼についての研究がどんだんなされれば、日本文学だけではなく、世界文学が大事な一歩を進んで行くことになる。